

第13回（平成29年度）
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

平成30年5月

有明工業高等専門学校
学校運営検討委員会

目次

1. まえがき	1
2. アンケート結果およびその分析	4
2.1 5年生卒業時アンケート	4
2.2 専攻科修了時アンケート	17
2.3 新入生アンケート	20
2.4 4年次編入生アンケート	24
2.5 OB・OGアンケート	26
2.6 企業アンケート	28
3. あとがき	31
付録 アンケート内容と集計結果	
付録1 5年生卒業時アンケート（平成29年2月実施）	
付録2 専攻科修了時アンケート（平成29年1月実施）	
付録3 新入生アンケート（平成29年3月実施）	
付録4 4年次編入生アンケート（平成29年8月実施）	
付録5 OB・OGアンケート（平成29年9～11月実施）	
付録6 企業アンケート（平成29年9～10月実施）	

1. まえがき

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育到達目標を達成できるように教育プログラムを設計・作成し、日々の教育活動を展開しています。この教育プログラムに沿って教育を実践している本校の教育システム（教育体制）は、常時、点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、継続的に改善を施し、向上させて行く必要があります。

学校運営検討委員会（以下、本委員会）は、本校の教育システムの点検、分析そして改善・向上の一環として、毎年、7種類のアンケート（一部隔年）を実施しています。学内では、卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、4年次編入生の3種類、学外では、OB・OG（本校卒業生）、企業（本校卒業生の就職先企業）、新入生および2年生の保護者*の4種類です（詳細は、表1を参照）。そして、これらのアンケートの結果を集計、分析し、改善点を「教育システム改善のためのアンケート調査報告書」（以下、調査報告書）として作成・公開し、教育システム改善・向上の一端を担ってきました。

今回の調査報告書の対象は、H28年度の卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、H29年度4年次編入生そしてH29年度新入生となります。

本調査報告書は、各アンケートをそれぞれ集計し、主に前年度の結果と比較し分析を行いました。

*2年生の保護者に対するアンケートはH18年度からH22年度まで実施。

表1 アンケート実施・分析状況一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第1回	H14年度	H15年1月	H14年度専攻科修了生	H16（2004）年 3月	JABEE 作業部会
		H15年2月	H14年度本科卒業生		
	H15年度	H15年7月	OB・OG		
		H15年11月	主な就職先企業		
第2回	H15年度	H16年1月	H15年度専攻科修了生	H17（2005）年 6月	JABEE 作業部会
		H16年2月	H15年度本科卒業生		
	H16年度	H16年6・9月	OB・OG		
第3回	H16年度	H17年2月	H16年度専攻科修了生	H18（2006）年 6月	学校運営 検討委員会
		H17年2月	H16年度本科卒業生		
	H17年度	H17年12月	OB・OG		
		H17年12月	主な就職先企業		
第4回	H17年度	H18年1月	H17年度専攻科修了生	H19（2007）年 7月	学校運営 検討委員会
		H18年2月	H17年度本科卒業生		
	H18年度	H18年4月	H18年度新入生保護者		
		H18年7月	H18年度2年次保護者		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第5回	H18年度	H19年1月	H18年度専攻科修了生	H20年(2008) 6月	学校運営 検討委員会
		H19年2月	H18年度本科卒業生		
	H19年度	H19年4月	H19年度新入生保護者		
		H19年4月	H19年度4年次編入生		
		H19年8月	H19年度2年次保護者		
		H19年12月	OB・OG		
		H19年12月	主な就職先企業		
		H20年2月	H19年度専攻科修了生		
		H20年2月	H19年度本科卒業生		
		H20年3月	H20年度新入生保護者		
	H20年度	H20年4月	H20年度4年次編入生	H20年9月	(追加版)
		H20年9月	H20年度2年次保護者		
第6回	H20年度	H21年2月	H20年度専攻科修了生	H21(2009)年 9月	学校運営 検討委員会
		H21年2月	H20年度本科卒業生		
		H21年3月	H21年度新入生保護者		
	H21年度	H21年4月	H21年度4年次編入生		
		H21年8月	OB・OG		
		H21年8月	主な就職先企業		
第7回	H21年度	H22年2月	H21年度専攻科修了生	H23(2011)年 7月	学校運営 検討委員会
		H22年2月	H21年度本科卒業生		
		H22年3月	H22年度新入生保護者		
	H22年度	H22年4月	H22年度4年次編入生		
		H22年9月	H22年度2年次保護者		
		H23年2月	H22年度専攻科修了生		
		H23年2月	H22年度本科卒業生		
		H23年3月	H23年度新入生保護者		
		H23年度	H23年4月		
	第8回	H23年度	H23年9月		
H23年9月			主な就職先企業		
H24年2月			H23年度専攻科修了生		
H24年2月			H23年度本科卒業生		
H24年3月			H24年度新入生保護者		
H24年度		H24年5月	H24年度4年次編入生		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第9回	H24年度	H25年1月	H24年度専攻科修了生	H25(2013)年 7月	学校運営 検討委員会
		H25年2月	H24年度本科卒業生		
		H25年3月	H25年度新入生保護者		
	H25年度	H25年4月	H25年度4年次編入生		
第10回	H25年度	H25年9月	OB・OG	H26(2014)年 10月	学校運営 検討委員会
		H25年9月	主な就職先企業		
		H26年1月	H25年度専攻科修了生		
		H26年2月	H25年度本科卒業生		
		H26年2月	H25年度全学生		
		H26年3月	H26年度新入生保護者		
	H26年度	H26年5月	H26年度4年次編入生		
H26年7月		H26年度全教職員			
第11回	H26年度	H27年1月	H26年度専攻科修了生	H28(2016)年 3月	学校運営 検討委員会
		H27年2月	H26年度本科卒業生		
		H27年3月	H27年度新入生保護者		
	H27年度	H27年5月	H27年度4年次編入生		
		H27年9月	OB・OG		
		H27年9月	主な就職先企業		
第12回	H27年度	H28年1月	H27年度専攻科修了生	H28(2016)年 9月	学校運営 検討委員会
		H28年2月	H27年度本科卒業生		
		H28年3月	H28年度新入生保護者		
	H28年度	H28年5月	H28年度4年次編入生		
第13回	H28年度	H29年1月	H28年度専攻科修了生	H30(2018)年 4月	学校運営 検討委員会
		H29年2月	H28年度本科卒業生		
		H29年3月	H29年度新入生		
	H29年度	H29年8月	H29年度4年次編入生		
		H29年9月	OB・OG		
		H29年9月	主な就職先企業		

2. アンケート結果およびその分析

2.1 5年生卒業時アンケート

現在までに実施した5年生卒業時アンケートの実施状況は表2-1-1のとおりである。H28年4月の5年在籍者数185名（機械：44，電気：34，情報：36，物質：38，建築：33）の内，留年者3名を減じ，H28年度の卒業生数は182名（機械：44，電気：34，情報：35，物質：37，建築：32）である。

5年生在籍者の185名を対象にWeb入力によるアンケートを行った。アンケート回答者数は173名（機械：38，電気：33，情報：39，物質：32，建築：31）であり，回答率は $173/182=95\%$ （H27年度90%）であった。

表 2-1-1 5年生卒業時アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
H14年度	H15年2月	177	161	91
H15年度	H16年2月	165	160	97
H16年度	H17年2月	190	180	95
H17年度	H18年2月	186	178	96
H18年度	H19年2月	192	178	93
H19年度	H20年2月	167	163	98
H20年度	H21年2月	171	168	98
H21年度	H22年2月	185	171	92
H22年度	H23年2月	174	170	98
H23年度	H24年2月	193	188	97
H24年度	H25年2月	180	177	98
H25年度	H26年2月	180	180	100
H26年度	H27年2月	198	186	94
H27年度	H28年2月	192	172	90
H28年度	H29年2月	185	173	95

【A：回答者自身に関する質問】

H28年度の5年生の学生数は4月時点では185名が在籍しており，内，留年者3名を除く，182名が卒業している。入学当時（H24年度，機械42，電気40，情報41，物質42，建築40，教務係調査による各科人数）は205名，4年次編入学生（H27年度，機械4，電気1，情報5，物質0，建築1）11名，3年次編入留学生（H26年度，機械1，建築1）2名が入学しており，これらの合計218名であった。また，1年次の在籍者数（前年度休学者，留年者を含む）は（機械44，電気40，情報41，物質44，建築40）209名であった。

『卒業後の進路』は全体では72%（121名）の学生が「就職」であり，H27年度の71%（130名）よりも1ポイント，H26年度の69%（129名）よりも3ポイントそれぞれ増加している。進学率は28%（H27年度26%，H26年度27%）と前年度とほぼ同じである。進学率のここ数年の推移を見てみると，H22年度の42%をピークにして，H23年度～H28年度まで，順に29%，25%，32%，27%，26%，28%となっており，ここ数年は30%弱前後で，ほぼ定着している。5年生全体に対する「大学」への進学は14%（23名）であり，H27年度11%（20名），H25年度15%（27名）とH26年度13%（23名）と比較して同程度である。「専攻科」への進学は14%（24名）であり，H27年度の15%（28名），H26年度15%（28名）に比して1ポイント減少している。また，1%（1名）の学生が「進路未定」と回答しており，H27年度1%（1名），H26年度3.4%（2名）と同程度である。

H28年度の進学の中で，大学への進学率は49%（H27年度が42%，H26年度が45%），専攻科の進学率が51%（H26年度が58%，H26年度が55%）であり，専攻科進学割合の方が上回っている。

進学の中で，改めて，専攻科への進学を見てみると，H24年度のみ専攻科定員20名に対して19名と定員

を下回ったが、H14年度～H28年度までは、順に、20名、28名、22名、24名、25名、36名、32名、26名、31名、32名、19名（H24年度）、29名、32名、28名、24名となっており、専攻科設置以来、定員の1.2倍～1.6倍の入学者が安定して確保されている。

H28年度の進学者の内訳を見てみると、機械工学科、電気工学科、電子情報工学科、物質工学科および建築学科の専攻科進学者数は順に、5名、4名、8名、5名、2名であり、大学進学者数は順に、5名、4名、5名、3名、6名となっており、建築学科では大学進学の方が上回っているが、他学科では1.0～1.7倍程度、専攻科進学の方が上回っていることがわかる。なお、建築学科においては定員よりも50%少ない進学者数となった。

【B：教育全般の総括に関する設問】

『一般教育』に対して「満足している」と回答したものは全体で29%であり、H27年度の38%に比べて9ポイント（H26年度の31%に比べて2ポイント）減少している。学科別では、電子情報工学科が31%と高く、H25年度からH27年度までと同様である。同じく建築学科が31%であるが、H27年度の47%から16%も減少し、H26年度の30%よりも1ポイントアップしている。物質工学科は23%であり、H27年度の32%から9ポイント減少しており、H26年度の23%に戻った形である。機械工学科は28%であり、H27年度の36%から8ポイント減少しているが、H26年度の24%に比べると4%高くなっている。一方、電気工学科は24%と低迷しており、H27年度の24%と同程度、H26年度の32%に比べても8ポイント低下している。

また、「おおむね満足している」を含めると全体で91%（H27年度90%、H26年度88%、H25年度82%）となっており、前年に引き続き、過去4年間で最高値となっている。

学科別では、電気工学科が94%と最も高く、次いで、機械工学科89%、物質工学科88%、建築学科87%そして電子情報工学科85%となっており、5学科とも高いポイントとなっている。機械工学科はH27年度の87%から2ポイント増（H26年度87%、H25年度89%、H24年度72%）であり、電気工学科はH27年度の90%に比して4ポイント増（H26年度95%、H25年度67%、H24年度88%）となっている。電子情報工学科はH27年度の86%よりも1%減（H26年度86%、H25年度94%、H24年度88%）であり、物質工学科はH27年度の84%から4ポイント増（H26年度87%、H25年度81%、H24年度91%）である。建築学科は、H27年度の97%から10ポイント減少（H27年度97%、H26年度84%、H25年度81%、H24年度98%）しており、最も減少の割合が大きい。今年度は電気工学科が突出して高いポイントであるが、過去4年間を通じて全学科とも80%台～90%台を推移しており、かなりの満足度と言える。

『専門教育』に関しては、「満足している」と回答したものは全体で37%となっており、H27年度の43%（H26年度39%）に比べて6ポイント減少（H25年度31%に比べて6ポイント増）している。

学科別で「満足している」を見てみると、機械工学科が42%で一番高く（H27年度41%、H26年度56%）、次いで電気工学科と建築学科が39%であった（電気工学科のH27年度63%、H26年度40%、建築学科のH27年度29%、H26年度22%）。電子情報工学科が41%（H27年度41%、H26年度40%）であり、3年間を通してほぼ同程度である。一番低いのが物質工学科の25%（H27年度32%、H26年度37%）であり、H27年に比べると7ポイント減少している。過去2年間で大きく上昇していたこともあり、この減少率は少し大きいと言える。

「満足している」と「おおむね満足している」を含めた『満足度』は全体では97%となっており、H27年度の91%よりも6ポイントも増加（H26年度89%、H25年度83%、H24年度90%）している。この結果を見ると、過去5年間において、かなり高い数値を維持していることがわかる。

学科別では、機械工学科が100%であり、H27年度の97%に比して3ポイントの増（H26年度92%、H25年度87%、H24年度94%）であり、過去4年間を通じて最も高い。次いで電気工学科と物質工学科が97%（電気工学科のH27年度100%、H26年度92%、H25年度87%、H24年度94%、物質工学科のH27年度71%、H26年度85%、H25年度81%、H24年度66%）、建築学科が90%（H27年度94%、H26年度84%、H25年度81%、H24年度98%）、電子情報工学科87%（H27年度91%、H26年度90%、H25年度88%、H24年度94%）となっている。この結果を見ると、電子情報工学科以外では90%を超えており、H28年度においては非常に高い満足度であったと言える。前年度だけで比較すると機械工学科と物質工学科で増加しているが他の学科では減少している。大きな減少は無く同程度と評価できるが、特に物質工学科では26ポイ

ントの上昇となっている。過去4年間で分析してみると、物質工学科を除く4学科は『満足度』が毎年高い数値を維持している。

『教育設備』に関しては、「満足している」は全学科平均で31%であり、H27年度の32%と比較して1ポイントの減少（H26年度38%、H25年度26%、H24年度33%）と、ほぼ変わらない。「おおむね満足している」まで含めた『満足度』は84%となっており、H27年度85%よりもわずか1ポイント減少している。（H26年度84%、H25年度74%、H24年度82%）過去4年間を総じて、学生の『満足度』は高いと言える。

学科別では、機械工学科の95%が圧倒的に高く（H27年度79%、H26年度85%、H25年度74%、H24年度69%）、次いで、電気工学科85%（H27年度98%、H26年度93%、H25年度67%、H24年度95%）、建築学科81%（H27年度88%、H26年度73%、H25年度72%、H24年度75%）である。物質工学科78%と電子情報工学科72%は共に80%を下回っており、H27年度の割合と比較すると（電子情報工学科H27年度88%、H26年度88%、H25年度94%、H24年度83%、物質工学科H27年度65%、H26年度81%、H25年度65%、H24年度81%）、電子情報工学科での落ち込みが16ポイントと大きいことがわかる。一方で、物質工学科ではH27年度よりも13ポイント増と、大きく向上している。

『学生生活』では「満足している」と回答した学生は全学では46%であり、H27年度の54%と比べて8ポイントも減少している。「おおむね満足している」までを含めると全学で87%であり、H27年度の89%（H26年度85%、H25年度82%、H24年度86%）よりも2ポイント減少している。しかしながら、過去4年間を見ても80%を超える高ポイントを維持している。

学科別で見ると、「満足している」と回答した学生は機械工学科、電気工学科および電子情報工学科が45%～55%の範囲であり、物質工学科と建築学科がそれぞれ31%と32%とやや低い。全体的に「やや不満である」と「不満である」の合計人数は本年度で22名であり、H27年度の14名から増加している。H25年度以降、機械工学科と電子情報工学科は高いポイントであるが、物質工学科ではH27年度の45%から14ポイント減少しており、全体でも極めて低い結果となっている。

『自分自身に実力がついたと思うか』の設問では「身に付いたと思う」と回答したものは、全学で22%（H27年度32%、H26年度32%、H25年度27%、H24年度31%）であり、過去4年間の平均30%よりもかなり低い値となっている。学科別では、電子情報工学科28%（H27年度26%、H26年度27%、H25年度31%）が最も高く、次いで機械工学科24%（H27年度41%、H26年度44%、H25年度32%）、物質工学科が22%（H27年度39%、H26年度19%）で20%を超えている。しかし、電気工学科18%（H27年度39%、H26年度44%、H25年度27%）、建築学科13%（H27年度13%、H26年度21%、H25年度31%、H24年度50%）と、20%を下回る結果となった。全体的には、例年のパーセンテージよりもかなり低い値となっており、H28年度に限った結果なのかどうかを継続的に見ていく必要があると言える。また、建築学科では、H24年度の50%をピークに大きく減少していることについても原因を検討しなければならない。

一方では、「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」までの回答を含めると、全学で84%であり、H27年度の85%（H26年度74%、H25年度69%、H24年度82%）とほぼ変わらない結果となっている。

学科別では、機械工学科と物質工学科が共に84%（機械工学科：H27年度91%、H26年度85%、H25年度68%、H24年度66%、物質工学科：H27年度77%、H26年度68%、H25年度60%、H24年度75%）であり、機械工学科では7ポイントの減少、物質工学科では7ポイントの上昇となった。続く電気工学科82%（H27年度95%、H26年度71%、H25年度64%、H24年度83%）、建築学科81%（H27年度82%、H26年度70%、H25年度72%、H24年度95%）と高いパーセンテージを得ている。電子情報工学科では77%（H27年度76%、H26年度76%、H25年度82%、H24年度88%）であり、5学科で比較するとポイントは低いが、過去4年を通して80%近い水準であることがわかる。全学科を4年間を通して見ると、いずれの学科もパーセンテージは上昇していると言える。電子情報工学科では大きな変化はないが70%後半で推移している。しかしながら、建築学科ではH24年度と比較すると14ポイントも減少していることから、5年前の教育水準との比較を見る必要があると考えられる。

【C：科目教育に関する設問】

○ 一般科目

表 2-1-2 一般科目の『必要性』

		機械		電気		情報		物質		建築		全体	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	89	91	88	90	77	95	84	93	87	91	87	92
	社会	76	76	76	73	67	84	81	86	84	91	78	82
	英語	92	100	82	95	85	92	97	100	100	97	93	97
	化学・物理	68	79	61	75	62	69	100	100	74	79	74	79
	体育	97	94	88	95	82	95	91	96	94	97	92	95
	美術・音楽	45	58	39	55	51	49	44	64	71	62	51	57
	数学（～2）	97	91	97	98	85	97	84	100	97	94	96	96
	物理（～2）	97	94	94	95	82	95	97	100	100	91	96	95
全学科共通科目	情報処理基礎	79	65	91	95	82	95	91	100	68	82	84	87
	工学基礎I, III	92	94	82	88	64	90	75	82	77	85	80	88
	数学（3～）	97	100	91	100	82	97	94	100	100	91	95	98
	物理（3～）	97	91	91	98	59	92	97	97	81	85	86	92
	卒業研究	97	97	91	100	82	92	100	93	97	88	95	94
	授業外科目	97	76	79	87	77	87	88	100	94	94	89	88

『必要性』に関しては、概ね80%以上となっており、教育システムとして大きな問題はないものと思われる。但し、例年ではあるが、「美術・音楽」は他と比べてかなり低い数値である。

表 2-1-3 一般科目の『教育実状』

		機械		電気		情報		物質		建築		全体	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	87	88	82	88	69	95	84	97	97	91	85	88
	社会	84	82	82	85	79	86	78	86	81	97	83	87
	英語	55	74	76	68	56	63	47	59	68	71	62	67
	化学・物理	84	79	82	80	67	68	94	93	81	85	83	80
	体育	89	94	94	93	82	85	84	86	94	94	91	90
	美術・音楽	74	71	61	70	64	69	66	71	87	85	72	73
	数学（～2）	100	97	91	98	82	95	97	96	94	100	95	97
	物理（～2）	92	100	94	95	77	90	91	100	94	97	91	96
全学科共通科目	情報処理基礎	74	79	88	93	79	90	84	93	71	85	81	88
	工学基礎I, III	92	85	85	95	77	87	81	86	84	88	86	89
	数学（3～）	97	94	94	100	79	100	97	100	90	94	93	98
	物理（3～）	92	88	94	100	72	100	91	100	84	94	88	98
	卒業研究	87	79	88	98	79	82	97	93	100	79	92	86
	授業外科目	アンケート項目なし											

『教育実状』に関しては、「英語」と「美術・音楽」を除くほとんどの科目で80%以上となっており、教育システムとして大きな問題はないものと思われる。「英語」は、他と比べても低い数値となっており、学生の考え方、実状をふまえて原因の分析と対応が必要である。

表 2-1-4 一般科目の『達成度』

		機械		電気		情報		物質		建築		全体	
		今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回
一般科目	国語	71	71	76	75	69	74	66	86	71	79	72	77
	社会	63	53	70	65	59	68	59	62	61	76	64	65
	英語	26	56	52	46	44	49	28	45	35	50	38	49
	化学・物理	47	59	48	75	44	51	88	86	58	74	57	64
	体育	92	91	85	83	79	69	78	86	90	76	87	81
	美術・音楽	39	59	42	50	36	59	25	64	61	65	41	59
	数学（～2）	87	91	97	98	77	97	84	96	87	85	88	94
	物理（～2）	87	82	94	95	64	87	72	89	74	71	80	85
全学科共通科目	情報処理基礎	61	47	85	90	77	92	63	86	61	74	71	78
	工学基礎I, III	87	82	88	88	59	79	63	86	55	71	72	81
	数学（3～）	84	88	85	93	74	97	66	93	81	76	80	90
	物理（3～）	74	79	91	90	54	79	63	93	58	70	69	82
	卒業研究	87	82	97	100	77	92	91	93	97	85	91	91
	授業外科目	82	65	79	77	69	82	78	96	84	82	80	80

『達成度』に関しては、60%以上となっている科目が7割以上ではあるが、英語、化学・物理、美術・音楽の科目の達成度が低い傾向にある。文系科目も『必要性』は高いことから、学生がどのようにして「達成した」という実感を感じるのかを考える必要もある。特に、「英語」は前年度から続けて全学科で60%を下回っている。

○ 機械工学科

H28年度のアンケートにおいて、『必要性』の項目に関して、「必要」あるいは「おおむね必要」と回答した割合は、全て97%~100%であり、(H27年度は94%~100%, H26年度は75%~95%) 過去3年間の中で最高ポイントが得られた。

『教育実状』の項目においては、「適性」あるいは「おおむね適性」と回答した割合も95%~100%の範囲(H27年度は82%~94%, H26年度は78%~98%)となり、いずれの年度と比較しても高いポイントとなった。

一方、『達成度』に関しても「身に付いた」あるいは「おおむね身に付いた」と回答した割合が、74%~89%(H27年度は79%~91%, H26年度は80%~90%, H25年度は71%~82%)の範囲となり、H27年度と比較すると3ポイント減少しているが、比較的高い数値であると考えられる。過去4年間、比較的高い『達成度』を安定して推移しているが、年度ごとに増減が大きな系統の科目もあることから、さらに向上するためには、教職員側の工夫・改善および学生側の学習に対する姿勢、意欲の向上が重要であると思われる。

○工学基礎系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	100%	94%	90%	90%
教育実状	95%	94%	93%	90%
達成度	84%	82%	80%	71%

○構造系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	97%	100%	93%	92%
教育実状	100%	91%	90%	84%
達成度	84%	91%	85%	82%

○加工系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	97%	97%	88%	92%
教育実状	97%	94%	85%	90%
達成度	87%	79%	80%	71%

○エネルギー系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	97%	100%	95%	90%
教育実状	92%	94%	98%	92%
達成度	79%	91%	85%	82%

○制御系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	100%	97%	95%	84%
教育実状	95%	88%	93%	80%
達成度	74%	88%	90%	76%

○総合系

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	100%	94%	75%	90%
教育実状	97%	82%	78%	87%
達成度	89%	91%	85%	79%

○機械工学科専門科目計

	H28 年度	H27 年度	H26 年度	H25 年度
必要性	99%	97%	89%	90%
教育実状	96%	91%	89%	87%
達成度	83%	87%	84%	77%

工学基礎系科目：工学基礎Ⅲ，工業力学，工業英語など

構造系科目：材料学，材料力学，機械振動学，機構と要素，機械要素設計，基礎塑性力学など

加工系科目：溶融加工，精密加工など

エネルギー系科目：熱力学，伝熱工学，水力学，流体力学，流体機械，熱機関工学など

制御系科目：コンピュータ工学，数値計算法，電気電子工学，計測制御，メカトロニクス基礎，メカトロニクス応用，システム制御工学など

総合系科目：機械基礎製図，創造設計演習，機械基礎実習，機械創造実習，機械工学実験，生産システム工学など

○ 電気工学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合、『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合、『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は，以下のとおりであった。

○電気電子基礎

	今回	前回
必要性	94%	97%
教育実状	94%	100%
達成度	91%	95%

○情報工学系

	今回	前回
必要性	94%	100%
教育実状	94%	98%
達成度	82%	78%

○電力工学系

	今回	前回
必要性	94%	100%
教育実状	94%	100%
達成度	88%	95%

○電子工学系

	今回	前回
必要性	85%	98%
教育実状	97%	100%
達成度	82%	90%

○電気電子共通

	今回	前回
必要性	88%	100%
教育実状	94%	98%
達成度	85%	95%

○電気工学科専門科目計

	今回	前回
必要性	91%	99%
教育実状	95%	99%
達成度	85%	91%

電気工学基礎：電気基礎，工学基礎II，電気磁気学，電気回路，電気電子計測など。

情報工学系：情報処理，計算機工学，計算機工学特論など。

電力工学系：電気機器，電気設計，電力輸送工学，電力発生工学，高電圧工学，パワーエレクトロニクス，電気材料，電気法規など。

電子工学系：電子デバイス，電子回路，電子物性，電子設計，論理回路，通信工学，電子工学特論など。

電気電子共通：電気電子工学演習，電気製図，制御工学，システム制御，機械工学概論，電気電子工学実験など。

上記の結果について，特徴的なことを以下に記す。

全体的には前年度よりもポイントが減少しているが，90%を超える科目が多い。『必要性』、『教育実状』に関しては，一部で85%前後のものもあるが，ほぼ90%以上となっており，教育システムとして大きな問題はないものと思われる。『達成度』については，前回の調査では，H27年度の90%台から80%台に下がっているが，それでも一定の成果が得られているものと思われる。

○ 電子情報工学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合、『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合、『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は、以下のとおりであった。

○電子情報基礎

	今回	前回
必要性	87%	97%
教育実状	85%	92%
達成度	82%	92%

○電子工学系

	今回	前回
必要性	85%	92%
教育実状	77%	92%
達成度	72%	92%

○情報工学系

	今回	前回
必要性	87%	97%
教育実状	87%	97%
達成度	82%	92%

○総合領域

	今回	前回
必要性	85%	92%
教育実状	85%	92%
達成度	79%	87%

○情報工学系の演習

	今回	前回
必要性	87%	92%
教育実状	85%	92%
達成度	82%	87%

○電子工学系の演習

	今回	前回
必要性	87%	92%
教育実状	85%	92%
達成度	77%	87%

○電子情報工学科専門科目計

	今回	前回
必要性	99%	95%
教育実状	96%	94%
達成度	91%	90%

電子情報基礎：工学基礎II，電子工学基礎，プログラミング，論理回路など

電子工学系：電気回路，電子回路，電磁気学，半導体工学，電気電子計測など

情報工学系：アルゴリズム，情報理論，数値計算法，言語処理系，情報ネットワーク，ソフトウェア工学など

総合領域：計算機工学，通信工学，情報処理システム，制御工学など

情報工学系の演習：情報工学演習，電子情報工学演習など 電子工学系の実験：電子工学実験

電子情報工学科専門科目計

上記の結果について，特徴的なことを以下に記す。

『必要性』、『教育実状』の科目計については，前年度と比較すると2~4ポイント程度増加している。各分野においては，『必要性』、『教育実状』において5ポイント程度減少しているが，電子工学系の教育実状77%を除いては全て85%を超えており良好であると考えられる。『達成度』に関しては，電子工学，総合領域と電子工学系の演習で80%を下回っており，科目における改善や工夫の必要性が考えられる。全体的には向上している傾向があるが，各科目での工夫が必要となる。

○ 物質工学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合、『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合、『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は、以下のとおりであった。

○基礎的な化学

	今回	前回
必要性	97%	100%
教育実状	100%	100%
達成度	88%	97%

○基礎的な生物

	今回	前回
必要性	88%	96%
教育実状	66%	93%
達成度	63%	86%

○基礎的な工学基礎

	今回	前回
必要性	88%	100%
教育実状	91%	100%
達成度	59%	86%

○専門展開

	今回	前回
必要性	94%	100%
教育実状	97%	97%
達成度	72%	97%

○物質コース専門科目

	今回	前回
必要性	88%	100%
教育実状	92%	100%
達成度	77%	96%

○生物コース専門科目

	今回	前回
必要性	87%	100%
教育実状	86%	86%
達成度	62%	86%

○実験

	今回	前回
必要性	97%	93%
教育実状	91%	97%
達成度	81%	100%

○物質工学科専門科目計

	今回	前回
必要性	92%	98%
教育実状	90%	96%
達成度	73%	93%

基礎的な化学（共通科目）：工学基礎Ⅱ，分析化学，無機化学，有機化学，有機化学，物理化学，化学工学など

基礎的な生物（共通科目）：生物化学，生物工学基礎など

基礎的な工学基礎（共通科目）：情報処理，工業英語，電気工学基礎，機械工学基礎，品質管理など

専門展開科目（共通選択科目）：機器分析学，生物工学基礎，材料工学基礎，環境化学，食品工学，高分子化学など

物質コース専門科目：機能材料工学Ⅰ，Ⅱ，プロセス工学，反応工学，物質工学演習など

生物コース専門科目：生体触媒工学，生物工学，微生物工学，生体高分子工学，生物工学演習など

実験：共通実験，コース別実験など

基礎的な化学，基礎的な工学基礎では『教育実情』は高いポイントとなっているが，基礎的な生物においては66%と，前年度と比較しても27ポイントも低い値となっている。単純に数字だけを見れば大きな変化であるが，その要因を詳しく分析する必要があると考えられる。『達成度』を見ると基礎的な生物と基礎的な工学基礎において60%程度しか達成できていない回答である。学生の自己評価ではあるが，前年度との教授

方法の比較を行ない、この大きな減少傾向を解明する必要がある。

専門展開科目や物質コース専門、生物コース専門の各科目に関しては87%を超える多くの学生が必要を感じていることがわかる。それに応じて、教育実状も86%～97%と高く、学生達の専門科目に対する意識の高さが伺われる。これらの科目に対する達成度では、生物コースの専門で62%と低くなっており、前年度の86%から24ポイント減少している要因を早急に突き止める必要があると言える。

実験に関しては、ほとんど全ての学生が必要を感じている。『教育実状』も91%と良好である。『達成度』に関しては81%の学生が満足しているが、前年度の100%からは大きな減少である。

物質工学科専門科目計で見ると『必要度』92%、『教育実状』90%、『達成度』73%となり、学生の意識は高いものの、それに対応した達成度を得られていないことが結果から窺うことができる。

○ 建築学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合、『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合、『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は、以下のとおりであった。

○建築学基礎

	今回	前回
必要性	94%	94%
教育実状	97%	97%
達成度	90%	91%

○計画系1

	今回	前回
必要性	81%	85%
教育実状	84%	88%
達成度	68%	76%

○計画系2

	今回	前回
必要性	87%	97%
教育実状	87%	94%
達成度	81%	88%

○環境系

	今回	前回
必要性	97%	97%
教育実状	94%	88%
達成度	74%	91%

○構造系

	今回	前回
必要性	97%	97%
教育実状	100%	97%
達成度	71%	88%

○構造系2

	今回	前回
必要性	100%	97%
教育実状	100%	94%
達成度	74%	82%

○生産系

	今回	前回
必要性	100%	91%
教育実状	94%	91%
達成度	74%	76%

○実験

	今回	前回
必要性	97%	91%
教育実状	100%	97%
達成度	84%	85%

○建築設計演習

	今回	前回
必要性	90%	94%
教育実状	90%	94%
達成度	81%	82%

○建築学科専門科目計

	今回	前回
必要性	95%	94%
教育実状	94%	93%
達成度	78%	84%

建築学基礎：造形、工学基礎Ⅱ、コンピュータ・リテラシ演習など

計画系1：建築デザイン，建築デザイン演習，日本建築史，西洋建築史，近代建築史など

計画系2：住環境計画，都市計画，都市設計，建築計画，建築設計論など

環境系：建築環境工学，建築設備，建築設備演習など

構造系1：構造力学，材料力学，構造力学特論，建築塑性解析，建築振動学など

構造系2：鋼構造，鉄筋コンクリート構造，基礎構造，構造計画，構造設計演習など

生産系：建築構法，建築材料，建築法規，建築生産など

実験：建築材料実験，建築実験実習など

建築設計演習：建築設計演習，卒業設計など

上述の結果について，特徴的なことを以下に記す。

『必要性』について，計画系の科目で80%台ではあるが，全体的には90%を超える水準に達している。前年度と比較した場合は，計画系で4～10ポイントの減少であることから，この要因をつかむことで，次年度の意識改革が期待される。『教育実状』では，構造系，実験科目での満足度が100%であり，他の科目においても，全体的には高い満足度での講義がなされている。

『達成度』に関しては，前年度と同程度の評価の科目が多いが，特に，計画系，環境系，構造系におけるポイントダウンが大きいいため，対応することが期待される。

【D：学習・教育到達目標に関する設問】

『教育の実状』では，「適正だった」と「おおむね適正だった」をあわせて肯定的回答として捉える。『達成度』については，「身に付いた」と「おおむね身に付いた」をあわせて肯定的回答として捉える。今回と前回の結果を見比べると学科別では70%台が増えており，特に達成度の低下が目立つ。全体的には，80%前半であり，一定の評価を得ていることがわかる。

学習・教育到達目標別に，回答結果を見る。今回は，A-1の達成度で78%となっているが，他の項目では80%以上となった。『教育の実状』および『達成度』ともに，昨年度の結果よりも3～5ポイント低下している。細かく見ると，『教育実状』では，A-1が88%であるものの，他の項目で90%以上（H27年度は全ての項目で91%以上，特にB-1においては96%という高水準）であった。『達成度』は，A-1からC-2に至るまで80%前半で，昨年度の90%台よりは10ポイント程度低下している項目が多い（H26年度はすべて80%台であった）。

学科別での値は異なるが70%後半から80%中段の評価を得ることができ，こうした結果に対し，「ほぼ高水準の評価が得られている」と分析している。今回は，H27年度の結果で見られた60%台の評価は無く，全体的には低下しているものの，ある一定の水準は保たれていると考える。

【E：その他に関する設問】

○ TOEIC関係の英語教育

一昨年までの評価は低かったが，H27年度から上昇している項目であり，本年度は昨年度とほぼ同程度であった。「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ割合は，前回比2ポイント（前回85%）減少の83%となった。学科別に見ると，電子情報工学科と建築学科で77%と評価が低めである。

○ 2年次の混合学級制度

過去数年と同じく，この設問で，「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ割合は非常に多く，これらの割合は，全学科で95%（H27年度90%，H26年度91%）であった。学科別に見ると，最も低い電子情報工学科で79%（H27年度95%）であり，最高が建築学科の100%（H27年度は物質工学科が最高値100%）であった。

○ 授業外単位制度

前回、前々回同様、高評価であった。この設問で、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ回答の割合は、前回の93%とほぼ変わらず、94%だった。学科別に見ても、すべての学科で高い評価が得られている（最も低い学科で87%）。

○ 追認制度

この設問の結果は、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ回答は多いが、昨年の92%よりも6ポイント程度減少している。学科別に見ると、多くの学科で80%を超える高い評価が得られているが、電子情報工学科では74%であった。

○ 1～3 学年次の LHR

LHRをいかに有意義で意味のある物にするかは、これまでも継続して課題として挙げられてきたことである。今回の結果は、「有意義だった」および「おおむね有意義だった」を選ぶ回答の割合が59%で、前年の73%から14ポイントの減少であった。各学科では、昨年度は70%を超えた学科があったが、本年度の結果では電気工学科67%、建築学科65%となり、機械工学科と物質工学科で50%台、電子情報工学科では49%となり50%を下回る結果となった。

○ 教育行事

前回は、「有意義だった」と「おおむね有意義だった」を選ぶ回答の割合が、電子情報工学科で79%にとどまった。今回は、電子情報工学科で72%、電気工学科で76%であったが、その他は84～91%以上の評価であった。全学科では、83%であった。

○ 特別活動 2

前回は、「有意義だった」と「おおむね有意義だった」を選ぶ回答の割合が全体で80%を超えた。一方、本年度は、電子情報工学科で74%、電気工学科で82%であるものの、他の学科では、94%以上の結果が得られており、学科による差があることがわかった。

○ シラバスの利用

「利用しなかった」と答える学生は、前回の7%と同程度で8%であった。「利用した」「それなりに利用した」という学生は55～71%に留まり、さらなる改善策を見つける必要があると言える。

○ レポート等のフィードバックはどうだったか

「適正」と「おおむね適正」との回答が全学科で78%となり、前回比6ポイント減で一昨年と同程度である。近年では改善傾向が見られていたが、このような増減が起こることもあり、継続した対策が必要と言える。

○ 授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の実状

『必要性』では、「必要」と「それなりに必要」を選ぶ回答は、前回の76%を上回る82%であった。

『実状』については、「機能していた」と「それなりに機能していた」を選ぶ回答の割合は、前回よりもやや低い67%で、再び60%台への落ち込みを見せた。

○ 授業改善アンケートの反映

「よく反映されている」と「おおむね反映されている」を選ぶ回答の割合は、全学科で74%となり、昨年度の70%よりも改善した評価であった。一昨年69%であることから高い評価ではないが、小さな進歩となっている。

○ 学修単位制で科目の中で、授業 15 時間、自学自習 30 時間を適用した科目

「意識した」と「ある程度意識した」との回答は全学科で50%となり、前回の63%よりも大きな減少となった。特に物質工学科で昨年の59%から本年度の38%と21%の減少と大きく、引き続き、学生に対して学修単位制の理解を促すことが必要である。

○ 学校の事務サービス

本年度の「よかった」と「おおむねよかった」の回答は75%であり、前年度の78%から3ポイント減少している。この値は、一昨年の全学科74%とほぼ同程度であった。

○ 進路支援

「よかった」と「おおむねよかった」の回答が全学科で83%であり、昨年度の91%から8ポイントの減少となった。特に、電気工学科79%と物質工学科78%となり、他学科においても80%台の評価であった。

○ 課外活動

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は全学科で85%となり、前回の82%から3ポイント増であった。

○ 学生相談室での対応

学生相談室の利用経験者は、全学科で46%だった。この値は、前回の57%よりも10%も少ないものである。また、利用経験者の回答に限ってみると、「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、前回の90%とほぼ同程度の89%であった。

○ 寮の運営・指導

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、NET（「入寮経験なし」を除く）で見ると、前回の65%よりも5ポイント減った60%であった。

【自由意見】

昨年度は20件であり、一昨年の72件から大きく減少していた。本年度は、17件で昨年と同様であるが、結果的には減少している。内訳は、機械5件、電気3件、情報8件、物質1件、建築0件であった。内容別分類によれば、「寮」が2件、「学校生活」が8件、「授業」が6件、「設備」が1件であった。

関係部署等においては、内容を精査し必要に応じて検討・改善を頂ければ幸いである。

2.2 専攻科修了時アンケート

H14年度から実施されたこれまでの専攻科修了時アンケートの実施状況を表2-2-1に示す。今回はH28年度専攻科修了予定者（アンケート時）に対して実施したアンケートに対する分析結果となる。

なお、専攻科学年定員は20名（生産情報システム工学専攻：12名、応用物質工学専攻：4名、建築学専攻：4名）であるため、年度により異なるものの、アンケート対象者は全専攻合わせて20～30名程度、専攻や系においては数名程度と少数であることに留意する必要がある。また、以後「生産情報システム工学専攻機械系」については単に「機械系」と表記し、「電気系」および「電子情報系」についても同様の表記とする。

表2-2-1 専攻科修了時アンケート実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
H14 (2002) 年度修了生	2003年1月	23	23	100
H15 (2003) 年度修了生	2004年1月	18	17	94
H16 (2004) 年度修了生	2005年2月	19	19	100
H17 (2005) 年度修了生	2006年1月	27	27	100
H18 (2006) 年度修了生	2007年2月	24	24	100
H19 (2007) 年度修了生	2008年1月	23	23	100
H20 (2008) 年度修了生	2009年2月	35	33	100
H21 (2009) 年度修了生	2010年2月	36	35	97
H22 (2010) 年度修了生	2011年2月	30	25	83
H23 (2011) 年度修了生	2012年2月	26	26	100
H24 (2012) 年度修了生	2013年1月	30	30	100
H25 (2013) 年度修了生	2014年1月	32	32	100
H26 (2014) 年度修了生	2015年1月	19	18	95
H27 (2015) 年度修了生	2016年1月	28	27	96
H28 (2016) 年度修了生	2017年1月	32	32	100

【A：回答者自身の専攻と進路に関する設問】

H28年度の回答者32名の内訳は、機械系9名、電気系4名、電子情報系9名、応用物質工学系7名および建築学専攻3名である。これらのうち大学院進学予定者は18名、他の14名が就職予定者である。表2-2-2にH24年度からH28年度までの大学院進学者数の推移を示す。年度により進学・就職の割合は変化するが、H28年度修了生については電子情報系を除く他の専攻・系において半数以上が進学しており、修了生全体での進学率が56.3%となっている。この進学率は、H24年度からの5年間において、H26年度の61.1%に次ぐ高さとなっている。また専攻・系ごとでは電気系が過去5年間で88.9%と突出して進学率が高く、次いで機械系50.0%、他の専攻・系では30%～35%となっている。

【B：教育全般に関する設問】

一般教育に対して一部の専攻で「やや不満」や「不満」と否定的な回答をした割合が多かったものの、全体では75.0%の学生が「満足」または「おおむね満足」と回答している。専門教育においても同様に「満足」または「おおむね満足」と回答した割合は81.3%と、一般教育とともに前年度と同様に7割を超えており、現状において大きな問題はないと思われる。また、「教育・研究環境」や「学業以外の学生生活」については「満足」または「おおむね満足」と回答した割合が前年度よりは低くなったものの、教育・研究環境、学生生活ともに71.9%と7割超を維持しており、概ね満足度は高い状態にあるといえる。「期待した実力がついたか」の設問に対しては、前年度(77.8%)並みの75.0%が「満足」または「おおむね満足」と回答している。

表 2-2-2 過去 5 年間における大学院進学者数の推移 (H24 年度～28 年度)

	H24 年度		H25 年度		H26 年度		H27 年度		H28 年度		5 年間 計	
	進学数	修了数	進学数	修了者	進学数	修了者	進学数	修了者	進学数	修了者	進学数	修了者
生産情報システム工学専攻(機械系)	4	7	2	7	2	2	2	5	5	9	15	30 (50.0%)
〃 (電気系)	3	5	4	4	7	8	6	6	4	4	24	27 (88.9%)
〃 (電子情報系)	2	7	4	9	1	2	1	6	2	9	10	33 (30.3%)
応用物質工学専攻	1	5	0	7	1	4	2	6	5	7	9	29 (31.0%)
建築学専攻	3	6	2	5	0	2	0	4	2	3	7	20 (35.0%)
計 (進学率)	13	30	12	32	11	18	11	27	18	32	65	139 (46.8%)
	(43.3%)		(37.5%)		(61.1%)		(40.7%)		(56.3%)		(46.8%)	

【C：各教科の教育に関する設問】

ほとんどの科目において『必要性』、『教育実状』、『達成度』の点から肯定的な回答（いずれの設問においても“1”または“2”と回答）の割合は 7 割を超え、良好な状況であると考えられる。唯一、「技術英語」の『到達度』のみ「身についた」あるいは「おおむね身についた」と回答した割合が 60%を切った。例年、アンケート結果から得られる「技術英語」の到達度はあまり高くなく、60%～70%を推移している状況である。一方で科目の必要性は高いと認識されているため、学生の達成度を上げるための工夫が望まれる。また、前回の報告書において指摘された地域協働関連科目の必要性の認識低下については、肯定的な回答が 65.0%と前年度の 57%からは改善されたものの、依然低い傾向にあるため、さらに検討する必要があると思われる。

また、特例適用専攻科認定に伴う科目変更により、「特別研究」が「特別研究Ⅰ」（専攻科 1 年次開講）と「特別研究Ⅱ」（専攻科 2 年次開講）に分割された。「特別研究Ⅰ」については『必要性』で 96.1%、『教育実状』で 78.1%、『到達度』で 84.4%の学生が肯定的な回答をしている。「特別研究Ⅱ」については『必要性』で 100%、『教育実状』で 81.3%、『到達度』で 90.6%と、いずれも「特別研究Ⅰ」を上回った回答が得られた。このことは、特別研究ⅠからⅡへと系統的に継続して学修することで、課題理解度の深まりや研究の進展へとつながったことが窺える。

【D：本校の学習・教育到達目標に関する設問】

図 2-2-1 に本校の学習・教育到達目標に関する『教育実状』と『到達度』のアンケート結果を示す。いずれも肯定的な回答（いずれの設問においても“1”または“2”と回答）の割合を示している。学習・教育到達目標「A3」（コミュニケーション能力）および「C2」（課題解決力）について、『教育実状』と『到達度』のいずれもが他の到達目標と比較して肯定的な回答の割合が低いことがわかる。とくにコミュニケーション能力に関しては前年度も低い傾向にあった。コミュニケーション能力や課題解決力を身につける手段として効果的とされている PBL や AL の導入をより一層すすめるなど、新たな教育手法の充実・改善や、カリキュラムの検討が望まれる。

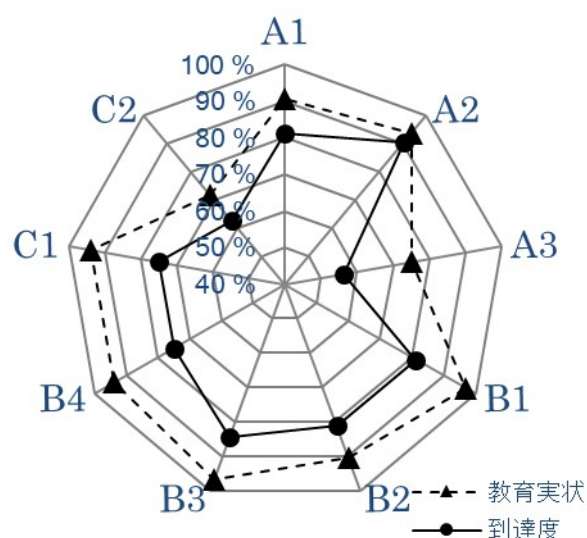


図 2-2-1 学習・教育到達目標に対する教育実状と到達度

【E：その他】

開講されている選択科目の充実については、いずれの分野においても 80%以上の学生が「満足」または「おおむね満足」と回答している。専攻科における少人数の授業形態にも 97%の学生が満足している。

また、学生支援の観点において、「授業時間外での教員の対応」、「進路支援」、「学生相談室での対応（利用経験のある学生の割合は25%）」はいずれも90%程度の学生が満足しており、引き続き丁寧な対応が望まれる。「事務サービス」については71.9%の学生が満足しており、比較的高い満足度ではあるが、一方で、自由記述欄に「対応があまり良くない」とのコメントが挙げられており、改善が求められる。

シラバスの利用に関しては、前年度と同様に75%程度の学生が「利用した」または「それなりに利用した」と回答している。H29年度よりWebシラバスを導入したため、利用状況も大きく変わる可能性もあり、継続して注視する必要がある。

研究に関連する設問として「学会等での発表」や「各専攻における特別研究発表」の経験はともに有益であった（「おおむね有益」を含む）と回答した割合が90%程度と、前年と同様に高い結果となった。「ポスターセッション」については「満足」あるいは「おおむね満足」と回答した割合は77.4%と高かったが、企画そのものについては、25%の学生が「必要ない」と感じており、「企画は良いが改善してほしい」との回答とあわせて半数に近い46.9%の学生は不満を感じているようである。前年も同様のアンケート結果であったため、企画の再検討が望まれる。

TOEICに対する支援体制については、前年よりもさらに満足度が低く、「やや不満」または「不満」と回答した割合は62.5%となった。H28年度専攻科入学生から、TOEICの成績に関する項目が専攻科修了要件から廃止されたが、英語力をはかる手段として就職先の企業で利用されたり、大学院受験にもTOEICスコアの提出が求められるなど、その必要性はますます高くなっているため、支援体制の強化が望まれる。

その他、TAについてはアンケート結果から81.3%の学生が経験しており、そのうち92.3%の学生が有益（「おおむね有益」を含む）であったと回答している。

今回のアンケートでは「技術士の資格」に関する新たな設問を加えた。技術士の資格の内容に対する認知度としては、「よく知っている」または「知っている」と回答した割合が25%という結果が得られた。また、資格の必要性については、半数が必要（「とても必要と思う」または「必要と思う」）と回答している。

2.3 新入生アンケート

現在までに実施した新入生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2-3-1の通りである。H28年度までは保護者を対象に本委員会独自でアンケートを実施してきたが、新入生を対象とした高専機構主導アンケートと内容が近いため、2つのアンケートをH29年度より後者に1本化することにした。

今回の分析は、H29年度における新入生を対象とし、前年度（H28年度）、前々年度（H27年度）と近い質問項目がある場合はその値を参照する形で行った。

表 2-3-1 新入生保護者および新入生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（％）
H18（2006）年度	H18年4月	保護者 215	202	93.9
H19（2007）年度	H19年4月	保護者 209	208	99.5
H20（2008）年度	H20年3月	保護者 210	210	100
H21（2009）年度	H21年3月	保護者 205	205	100
H22（2010）年度	H22年3月	保護者 215	207	96.2
H23（2011）年度	H23年3月	保護者 212	203	95.7
H24（2012）年度	H24年3月	保護者 209	137	65.5
H25（2013）年度	H25年3月	保護者 209	186	88.9
H26（2014）年度	H26年3月	保護者 205	194	94.6
H27（2015）年度	H27年3月	保護者 207	73	35.3
H28（2016）年度	H28年3月	保護者 208	156	75.0
H29（2017）年度	H29年3月	新入生 207*	207	100

* H29年度の1年次在籍者数は214名だが、前年度からの留年者数7名を除いた207名を「新入生」とみなし、本アンケートの対象としている。

【回答数および回答率】

本アンケートは入学手続き説明会の時に配布・実施している。回答率は100%であった。実施方法については問題無いと思われる。

【（設問1）志望動機】

表2-3-2に志望動機に関するアンケートの結果を示す。13の項目のうち、3つまで回答可としている。教育内容および就職率が回答全体の23%を占め、同率の上位となった。また、早期専門教育や5年一貫教育という高専のシステムの評価も高かった。なお、従来の保護者アンケートでは「有明高専入学の決め手」という設問があり、本設問と近いためH28とH27年度のデータも同様の項目がある場合にのみ参考までに掲載した（該当項目がない場合は斜線を入れている）。高い就職率が高専の1つの魅力であることが窺える。ちなみに、H28年度の最上位項目は「本人の希望」が32%であった。

表 2-3-2 志望動機

	H29 [%]	H28 [%]	H27 [%]
教育内容	23	9	7
5年一貫教育	15		
早期専門教育	19		
就職率	23	23	24
大学進学	8	12	13
専攻科	4	7	6
JABEE 認定	1		
教員	1		

寮	1	5	4
立地・通学環境	1	3	5
ロボコン	2		
課外活動	2		
その他	1		

【(設問2) 受験検討時期】

表 2-3-3 に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。8つの項目のうち、1つのみ回答可としている。その他では小学校4年生から検討を始めている者もいたが、ほとんどの者が中学校に入学してから検討しており、学年と学期についてはあまり大きな偏りが無いことが窺える。

表 2-3-3 受験検討時期

	H29 [%]
中 1	18
中 2 第 1 学期	9
中 2 第 2 学期	13
中 2 第 3 学期	13
中 3 第 1 学期	15
中 3 第 2 学期	23
中 3 第 3 学期	2
その他	8

【(設問 3) 受験決定時期】

表 2-3-4 に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。8つの項目のうち、1つのみ回答可としている。その他では小学校6年生で受験を決定している者が1名いたが、ほぼすべての者が中学校に入学してから決定していた。なお、H28、H27年度の保護者対象アンケートでは「有明高専受験を決定した時期」という設問があり、本設問とほぼ同じであるためH28とH27年度のデータも掲載した。例年、中学3年生の1学期または2学期に決めている者が多いことが窺える。

表 2-3-4 有明高専受験を決定した時期 (%)

	H29	H28	H27
中 1	5	13	3
中 2 第 1 学期	2	4	1
中 2 第 2 学期	3	7	7
中 2 第 3 学期	6	7	10
中 3 第 1 学期	28	32	25
中 3 第 2 学期	39	25	32
中 3 第 3 学期	16	9	17
その他	1	5	7

【(設問 4) 関心を持った経緯】

表 2-3-5 に関心を持った経緯に関するアンケートの結果を示す。17の項目のうち、3つまで回答可としている。オープンキャンパス・見学会等および高専主催説明会が上位を占めているが、その他の項目も幅広く回答があり、関心を持ってもらうには学校等に直接来てもらうことと幅広い広報活動が大切であることが分かる。その他の意見として祖父、家庭教師、ロボコンのテレビ中継、ロボ Jr、それゆけ！女子高専生を読んだ、などが挙げられた。なお、従来の保護者対象アンケートでは「進路決定の際、有明高専の情報を何で得ましたか」という設問があり、本設問に近いので、H28とH27年度のデータも同様の項目がある場合にのみ

参考までに掲載した（該当項目がない場合は斜線を入れている）。H28 と H27 年の結果では最上位の項目は「以前から知っていた」が 60%であった。

表 2-3-5 関心を持った経緯 (%)

	H29	H28	H27
高専主催説明会	12		
体験入学等	4		
オープンキャンパス・見学会等	18		
高専祭	5		
公開講座	0		
出前授業等	0		
パンフレット	11	8	7
ホームページ	6	3	1
中学校主催説明会	4	3	1
中学教師	5	3	6
塾	4	4	3
友人	5		
先輩	5		
親	16	19	21
兄・姉	2		
新聞等情報誌	0		
その他	1		

【(設問 5) 有明高専を最初に知った時期】

表 2-3-6 に有明高専を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。6 つの項目のうち、1 つのみ回答可としている。中学 1 年 が最上位の 32% を占め、次に小学校高学年が 28% であった。(設問 4) と合わせて参照すると、小学高学年や中学 1 年次に本校のオープンカレッジに参加し、有明高専のことを最初に知る者が多い可能性が高い。

表 2-3-6 有明高専を最初に知った時期 (%)

	H29
小学低学年	3
小学高学年	28
中学 1 年	32
中学 2 年	20
中学 3 年	14
その他	3

【(設問 6) 中学生当時に必要としていた情報】

中学生当時に必要としていた情報を自由記述として寄せて頂いた。主なものとして、就職先・就職率、進学先、コース・学科の特色やカリキュラム、コース選択の流れ、授業内容、部活動、寮、学校の雰囲気、女子学生に関する情報、海外研修や留学の有無、制服のデザイン、普通高校等との違い、学費、通学方法、偏差値、取れる資格、学校行事・年間スケジュール、専攻科などが挙げられた。公式ホームページや学校説明会で以上の話題を盛り込んでいくことが望ましい。

【(設問7)「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか】

高専機構が作成したパンフレット「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか問う設問において、有効回答数198のうち、読んだことのある者が全体の23%、読んだことのない者が全体の77%であった。なお、入学生数の男女の内訳は男子158名(76%)、女子49名(24%)となっており、ほぼすべての女子がパンフレットを読んでいる可能性がある。今後の広報物作成の参考にされたい。

【(設問8)「高専」という選択」を読んだことがあるか。】

高専機構が作成したパンフレット「高専」という選択」を読んだことがあるか問う設問において、有効回答数200のうち、読んだことのある者が17%、読んだことのない者が84%であった。今後の広報物作成の参考にされたい。

2.4 4年次編入生アンケート

現在までに実施した4年次編入生アンケートの実施時期および回答者数等は次の表の通りである。今回は、H29年度4年次編入生に対して実施したアンケートの分析である。

表 2-4-1 4年次編入生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
H19年度	H19年4月	11	11	100
H20年度	H20年4月	11	10	91
H21年度	H21年4月	7	7	100
H22年度	H22年4月	9	9	100
H23年度	H23年4月	12	12	100
H24年度	H24年5月	12	12	100
H25年度	H25年5月	13	13	100
H26年度	H26年5月	8	8	100
H27年度	H27年5月	11	11	100
H28年度	H28年5月	16	16	100
H29年度	H29年8月	12	12	100

【所属学科】

機械4名、電気4名、情報2名、物質1名、建築1名の合計12名。

【通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活について】

12名の内、通学生8名、寮生4名である。通学生の通学方法は「バイク」5名が最も多く、次いで「徒歩」、「公共交通機関」および「自転車」がそれぞれ3名と続く（複数回答可のため、総数は一致しない）。また、自家用車送迎は2名となっている。

寮生活については、寮生4名全員が「心配ない」と回答している。

【有明高専の認知と情報取得方法】

有明高専を「以前から知っていた」という回答が4名、「高校の先生から」および「知人から」が5名および3名となっている。「ホームページ」や「ポスター・パンフレット」と回答した学生がおらず、昨年の分析結果とほぼ同様であった（原因として編入生向けのポスター等を配布していないことが判明したため、アンケートの設問項目を見直すなどの検討が必要）。電子媒体に関しては、後に述べる進路決定の際には効果が見られるが、最初に認知してもらうためには伝聞が有効であることは例年と同様の傾向である。「高校における学校説明会」と回答した学生は多くの年と同様に0名となっている。

進路決定の際の情報取得方法（複数回答可）に関しては「ホームページ」からが7名、および「ポスター・パンフレット等」からが5名、「知人」からが3名、「高校の先生」からが6名と多数を占めている。高校の先生からの進路指導もさることながら、ホームページでの情報取得の割合が年々増加してきている。昨年度「オープンカレッジ」と回答した学生が3名だったが本年度は1名と減少している。その他、「高校における学校説明会」「知人」がそれぞれ2名、3名となっている。

【受験決定時期と入学の決め手】

H26年度は「2年2学期頃」、H27年度は「2年3学期頃」、H28年度は「昨年5月頃」が一番多かったが、本年度は「昨年5月頃」が2名、「昨年4月頃」が1名、「2年3学期頃」が6名、「2年1学期頃」「1年頃」「それ以前」がそれぞれ1名となっている。本年度は、高校2年の時以前から進路を決定している学生の割合が多いことが特徴である。

入学の決め手（複数回答可）は「就職率が高い」が10名で最も多く、「経済性」が7名、「大学に編入でき

る」が6名、「専攻科へ進学できる」が4名、「学生教育がしっかりしている」が2名となっており、例年のように就職・進学への意識の高さがうかがえる傾向が現れている。例年と異なる点としては、「経済性」と回答している学生数が半数を超えていて、増加してきていることがあげられる。この特徴は、編入を考えている高校生に、本校の特徴として今後も大きくアピールできる点となるであろう。

その他、「JABEEに認定されている」「立地・環境」「設備」「その他」がそれぞれ1名ずつとなっている。

【入学後の心配】（複数回答可）

「学業」が7名、「学校生活」が1名、「心配なし」が5名となっている。「心配なし」の割合が例年より高くなっているのは、本年度のアンケートの実施時期が8月と例年より3ヶ月ほど遅かったため、本校の情報がより多く入っていたり、各種の経験が蓄積しているためと考えられる。心配事の項目としては、例年のように「学業」に対する心配が一番多い。本結果を受けて、各学科での編入生に対する学業面でのできる限りのサポートが期待される場所である。

【アドミッションポリシーに対する意識】

アドミッションポリシーを「意識した」が9名、「意識しなかった」が3名となっており、「意識した」と回答した学生の割合が昨年度より低下している結果となった。より一層のアドミッションポリシーの周知徹底が必要であると考えられる。

【高専卒業後の進路について】

「就職」が6名、「専攻科進学」が2名、「大学編入学」が2名、「考えていない」が2名となっている。「考えていない」が2名となっているが、入学時点で卒業まで2年足らずの状態であるせいか、概ね入学時に進路に関して考えている学生が多い。

【有明高専への要望、自由意見】

要望としては「単位をください」、自由意見としては「テスト日程がきつい」という記述がみられた。どちらも学業に関する記述であり、編入生の単位取得や定期試験等の学業面に関する不安な心情を表しているように思われる。

例年とほぼ同様の傾向ではあるが、少なからず新しい環境に不安を抱えている学生がいる。全学生からすると編入生の割合は少ないかもしれないが、編入制度は本校にとって学生確保のための重要な制度となっている。専門学科を中心とした、編入生が新しい環境に早く慣れるような、学業面を中心としたサポートを期待したい。

2.5 OB・OG アンケート

現在までに実施したOB・OGアンケートの実施時期、および回答者数を表2-5-1に示す。今回は、H29年度の9月～10月に、H24～26年度（2013年3月～2015年3月）卒業生、および専攻科修了生を対象に実施したアンケートの分析結果となる。H29年度の回答者46名の内訳は、本科卒業生33名、専攻科修了生13名である。

表2-5-1 OB・OGアンケートの実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成15年度	平成15年7月	500	140	28
平成16年度	平成16年6月・9月	817	130	16
平成17年度	平成17年12月	486	73	15
平成19年度	平成19年12月	512	84	16
平成21年度	平成21年8月	629	97	15
平成23年度	平成23年9月	322	37	11
平成25年度	平成25年9月	332	44	13
平成27年度	平成27年9月	335	66	20
平成29年度	平成29年9月・10月	552	46	8

【ディプロマポリシー】

H29年度から、有明工業高等専門学校教育において導入したディプロマポリシーに関するアンケートを実施している。以下に、アンケートの回答に対する分析結果を記述する。

○ 本科

本科の教育におけるディプロマポリシーのうち、必要度が高い3項目を選択するアンケートについて、回答結果の分析を記述する。ディプロマポリシーの各項目において、投票率の差異はほとんど見られず、およそ20%となった。特に投票率の高かった項目は、「1. 幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身に付けた技術者」と「2. 専門工学に関する高度な知識と創造性に富み、実践力を身に付けた技術者」で、両項目ともおよそ23%の投票率となっている。

○ 専攻科

専攻科の教育におけるディプロマポリシーのうち、必要度が高いと思われるすべての項目を選択するアンケートについて、回答結果の分析を記述する。特に投票率の高かった項目として、「1. 物事を多面的に考察できる力、社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観、および優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者」が44%、「3. 課題の探求能力に優れ、またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者」が33%の投票率となっている。なお、ディプロマポリシーの育成目標を不要とする回答は無かった。

【学習・教育到達目標】

○ 本科

本科の学習・教育目標については、不要な項目を指摘する回答は4名(12%)から挙げられている。具体的には、「専門知識」を不要とする回答は2名、「実践力」を不要とする回答は1名、「学際的知識」を不要とする回答は1名から挙げられている。特に、「学際的知識」を不要とする回答は、前回のアンケートでも2名から挙げられており、今後も注視する必要があると考える。

取り入れることが望ましい項目があるとする回答は10名(30%)から挙げられている。寄せられた意見の多くは、学習・教育到達目標の各項目に関連している。例えば、学習・教育到達目標の「(B)-5. 専門知識」や「(B)-6. 実践力」に関連して、専門分野の内容を理解するのみではなく、「高度な専門知識の獲得と実践経験、実践力」が必要という意見が挙げられている。同様に、「(A)-3. コミュニケーション能力」に関連して、「説明能力を含めたコミュニケーション能力」、「自分とは価値観の異なる他者とのコミュニケーション能力」が必要という意見が挙げられており、「(C)-8. 課題探求力」や「(C)-9. 課題解決力」に関連して、「自己分析力と自己理解力」、「探究への姿勢（課題を機械的にこなすだけでなく、物事の本質に興味をもって取り組めること）」が必要という意見が挙げられている。また、「チームワーク能力」、「最低限の礼儀やマナー」が必要という意見も寄せられている。

○ 専攻科

専攻科の学習・教育到達目標においては、不要な項目は無いとする回答は7名(54%)から挙げられた。学習・教育到達目標の各項目において、およそ3名が不要と回答している。特に、「5. 工学の専門知識」を不要とする回答は5名から挙げられている。一方、学習・教育到達目標に取り入れることが望ましい項目があると回答は2名(15%)から挙げられており、具体的には「柔軟なコミュニケーション能力」という意見が寄せられている。

【教育における到達度、満足度の評価】

○ 本科

最初に、各科目の理解度の分析結果について記述する。一般教育科目について、肯定的評価（「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」）とする回答は、文系科目において14名(42%)であり、前回アンケート時の40%をわずかに上回る結果となっているものの、理解度が低いと感じている学生が多いことがわかる。また、理系科目では28名(85%)が肯定的評価であり、前回アンケート時の60%を大きく上回っている。専門教育科目についても同様に、肯定的評価に着目すると、座学系科目は26名(78%)、実技系科目は27名(81%)であり、理解度における自己評価として、肯定的な評価が多いことがわかる。

次に、教育環境や学生生活の満足度について記述する。教育・研究環境について、肯定的評価（「満足している」や「おおむね満足している」）とする意見は、32名(97%)から挙げられており、学習環境は問題無いと言える。また、学業以外の学生生活は、肯定的評価となる意見は32名(97%)から挙げられており、充実した学生生活を送っていたことが窺える。

高専卒業時に学生が身に付ける必要がある能力として、特に投票率の多い項目は、「専門の基礎知識」、「創意・工夫能力」、「一般的教養」、「プレゼンテーション能力」が挙げられている。また、必要な能力として多くの意見が寄せられているが、「1. 学習・教育到達目標」で記述した項目と重複するため、ここでは割愛する。

最後に、実技系科目を多く学んだことが、現在の仕事の上で役に立っているかという質問に対する回答として、肯定的評価（「役に立っている」や「おおむね役に立っている」）となる意見は25名(75%)から挙げられている。

○ 専攻科

本科と同様に、最初に、各科目の理解度について記述する。一般教育科目について、肯定的評価とする回答は、文系科目は4名(31%)であり、前回アンケート時の50%を下回る結果となっている。一方、理系科目は11名(84%)であり、肯定的評価とする回答が多い。専門教育科目における肯定的評価とする回答は、座学系科目は10名(77%)、実技系科目は12名(93%)であり、いずれも肯定的な評価が多いことがわかる。

次に、教育環境や学生生活の満足度について記述する。教育・研究環境について、肯定的評価となる意見は9名(70%)から挙げられており、学習環境はおおむね問題無いと言える。また、学業以外の学生生活は、肯定的評価となる意見は13名(100%)から挙げられており、充実した学生生活を送っていたことが窺える。

最後に、高専専攻科修了生と大学学部卒業生を比較する際に、業務遂行能力において違いがあるとする意見は、8名(62%)から挙げられている。具体的には、高専専攻科修了生が優れている点として、「実習を多く経験して身に付く実践力」、「学会発表などから得られる行動力」、「実験や工作作業で発揮される器用さ」、「実物の評価（現地、現物、現認）」、「幅広い分野の知識」という意見が挙げられている。一方、「プレゼンテーション能力」、「訴求力」、「外国語」、「一般常識」は、大学学部卒業生の方が優れているという意見が挙げられている。しかし、これらの項目は個々人に依るもので、一概に高専専攻科修了生が劣っているわけでは無いとする意見や、社会人の生活を通して身に付く技術であるため、学習時間等を削減してまで学校で教えなくとも良いとする意見も寄せられている。

【今後の有明高専がさらに良くなるためのアイデア】

貴重な意見が多数寄せられた。これまでに記述した「語学力」や「コミュニケーション能力」の向上を目指す教育を行うというアイデアの他、「地域や近隣の企業と連携した授業」というアイデアも寄せられた。

2.6 企業アンケート

現在までに実施した企業アンケートの実施状況一覧は表 2-6-1 のとおりである。企業アンケートは 2 年ごとに実施しており、今回は H 29 年度に実施したアンケートの分析である。

表 2-6-1 企業アンケートの実施状況一覧

	実施時期	調査企業数 (社)	回答企業数 (社)	回答率 (%)
H15 年度	H15 年 11 月	500	153	31
H17 年度	H17 年 12 月	500	151	30
H19 年度	H19 年 12 月	442	159	36
H21 年度	H21 年 8 月	424	158	37
H23 年度	H24 年 9 月	422	137	32
H25 年度	H25 年 9 月	354	120	34
H27 年度	H27 年 9 月	335	103	31
H29 年度	H29 年 9 月	351	126	36

【回答数】

回答社は全体で 126 社であり、回答社数は H19 年度の 159 社をピークに毎回減少していたものの今年度は若干歯止めがかかった感じである。調査年度により、調査企業数の変動はあるものの回答率は 30%~37% と変動は少ないが、低回答率である。調査方法は、H25 年度以降、原則 WEB 入力のみとしたが（今年度は郵送、メールによる回答が 8 社あった）、調査方法による回答率の変動は大きくないと考えられる。今後もアンケートの実施時期、調査企業の選定、回答方式などを検討する必要がある。なお、126 社全てが全ての設問に回答しているわけではなかったため、アンケート集計表では 126 社に満たないところがある。

【1 学科体制への移行に関する設問】

H28 年度に創造工学科に改組したことを踏まえて、1 学科 6 コース体制に関する調査を行った。『良いこと』と『ある程度良いこと』と感じている企業が 63%あり、『あまり良くない』と『良くない』の 10%に比べ非常に高いことから、学科改組は肯定的であることがうかがえる。但し、『わからない』との回答も 15%あり、これは採用活動において創造工学科 1 学科体制を意識するから『わからない』の 11%と近い値を示した。これらのことから、1 学科 6 コース体制の企業としての取り扱いの難しさが感じられ、卒業生の評価が改組の真価を問われるところであると考えられる。また、『知らなかった』との回答が 10%あり、企業に対する学科再編の広報活動、詳細な説明が重要である（重要になる）ことが感じられた。

【ディプロマ・ポリシーに関する設問（本科）】

H29 年度にディプロマ・ポリシーを制定したことを踏まえて、ディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。重要度の高いものを 3 つ選んでもらう方式であったが、『幅広い…』(27%)と『専門工学…』(22%)と『自己啓発…』(31%)の項目に比べ『多様な…』(12%)と『国際社会…』(8%)が半分以下の低い結果となった。今後の動向を注視しておく必要がある。企業が必ずしも 3 つを選んでいないこともあり、設問方法も修正が必要であると考えられる。

【ディプロマ・ポリシーに関する設問（専攻科）】

H29 年度にディプロマ・ポリシーを制定したことを踏まえて、ディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。重要度の高いものを選んでもらう方式であったが、『物事を多面的…』(51%)の項目が『工学の基礎知識…』(24%)と『課題の探求能力…』(25%)の項目に比べ 2 倍以上高い結果となった。今後の動向を注視しておく必要がある。（本科）と同様、設問方法も修正が必要であると考えられる。

【1 学科体制での採用活動についての設問】

H32 年度から創造工学科の学生が卒業するため、創造工学科学生の採用に関する調査を行った。1 学科体制に対する採用活動への意識は『意識する』『ある程度意識する』と回答している企業が 40%、『ほとんど意識しない』『まったく意識しない』が 49%と均衡しており、創造工学科 1 学科体制の魅力が企業にうまくアピールできていないことが考えられる。また、『わからない』との回答も 11%あり、企業に対する学科再編の広報活動、詳細な説明が重要である（重要になる）ことが感じられた。

【JABEE 認定校の意識に関する設問】

採用に関して、JABEE 認定校の卒業生であることを『意識して行う』と『ある程度意識して行う』を合わせて 27%であり、前回（H27 年度）の 20%を 7 ポイント上回っている。ただし前々回（H25 年度）は 38%、その前（H23 年度）が 15%であり、変動の大きい設問のため今後の動向を見ていく必要がある。また、『ほとんど意識しない』という回答は 52%であり、前回（H27 年度）は 59%、前々回（H25 年度）は 57%であることから、JABEE 認定校であることを採用時に意識しないという傾向は高止まりしていることがわかる。また、JABEE 認定校出身者と非認定校出身者において、『（待遇などに何らかの差をつける）計画はない』という回答は 85%であり、前回（H27 年度）の 83%、前々回（H25 年度）の 80%、またそれ以前ともほとんど変化がない。したがって、企業側から見ると、JABEE 認定校に対する意識はあまり高くなく、必然的に待遇面も反映されるところまでには至っていないと判断される。

【卒業生に関する設問】

入社時の実力について、『満足』が24%であり、前回（H27年度）は27%、前々回（H25年度）は29%であり、わずかではあるが減少傾向が続いている。『おおむね満足』が55%であり、前回（H27年度）は54%、前々回（H25年度）は49%であり、わずかではあるが減少傾向が続いている。全体的に入社時の実力の“満足度”（『満足』と『おおむね満足』の合計）は79%と安定して高いが、低下傾向にあることは気に留めておく必要があるかもしれない。

また、入社後の仕事ぶりについては、『満足』が32%であり、前回（H27年度）は32%、前々回（H25年度）は27%であり、大きく変わっていない。『おおむね満足』が52%であり、前回（H27年度）は51%、前々回（H25年度）は55%であり、大きく変わっていない。『普通』が14%であり、前回（H27年度）は14%、前々回（H25年度）は16%であり、大きく変わっていない。総じて、入社後の仕事ぶりの“満足度”（『満足』と『おおむね満足』の合計）は87%と安定して高いと言える。

【修了生に関する設問】

入社時の実力について、『満足』が28%であり、前回（H27年度）は33%、前々回（H25年度）は23%であり、変動はあるものの大きくは変わっていない。『おおむね満足』が52%であり、前回（H27年度）は51%、前々回（H25年度）は49%であり、大きくは変わっていない。『普通』も19%であり、前回（H27年度）は16%、前々回（H25年度）は19%であり、大きくは変わっていない。全体的に、“満足度”（『満足』と『おおむね満足』の合計）は80%と安定して高いと言える。

入社後の仕事ぶりについては、『満足』が37%であり、前回（H27年度）は23%、前々回（H25年度）は48%であり、変動はあるものの大きくは変わっていない。『おおむね満足』は49%であり、前回（H27年度）は39%、前々回（H25年度）は42%であり、大きくは変わっていない。こちらも全体的に“満足度”（『満足』と『おおむね満足』の合計）は86%と高評価と言える。

【取得してほしい資格に関する設問】

複数回答のため、122件の回答が得られ、前回（H27年度）の108件、前々回（H25年度）の115件とほぼ同数となった。各業種に対応した資格が回答されており、取得して欲しい資格については多岐に及ぶ。また、得られた結果は、回答が得られた企業業種に因るところが大きい。企業側から見れば、約5割が在学期間中に可能であればその業種に必要な資格取得を望まれているようであるが、学校側から見れば取得に向けての対応は難しい状況かと思われる。

【専攻科修了生と大学卒業生の比較に関する設問】

回答数 123 社のうち、『専攻科生の採用実績がない』が 28 社であり、全体の 23%を占めている。前回 (H27 年度) は 21% (103 社中 22 社)、前々回 (H23 年度) は 24% (120 社中 29 社) であり、採用実績は大きく変わっていない。

専攻科生の採用実績がある 95 社の回答を分析してみると、『(業務遂行能力の差は) ないと思う』が 57% であり、前回 (H27 年度) は 57%、前々回 (H25 年度) は 62%であることから、大きくは変わっていない。『あると思う』が 17%であり、前回 (H27 年度) は 12%、前々回 (H25 年度) は 20%である。また、『少しあると思う』が 26%であり、前回 (H27 年度) は 31%、前々回 (H25 年度) は 19%であり、変動の大きな設問である。『あると思う』と『少しあると思う』を合わせると、今回 (H29 年度) は 43%、前回 (H27 年度) は 43%、前々回 (H25 年度) は 39%であり、過去 3 回は 40%前後であったことから、『大学学部生との比較』においては、『(差は) ないと思う』が 60%程度、『あると思う』と『少しあると思う』で 40%程度と年度による変動がなく、この数字が専攻科生の評価に近いと思われる。

『あると思う』および『少しあると思う』と回答した企業に、その差異を尋ねたところ、33 件 [32 件 (H27 年度)、27 件 (H25 年度)] の回答を頂いた。その内容は多岐にわたっている。『専攻科修了生が優れている点』としては、前回以前からも評価されている「実践的な能力が高い」や「専門分野における深い知識がある」で複数回答があるのに対し、前回まで評価されていた「即戦力としての経験や能力が高い」が 1 件にとどまっているほか、「熱心で純粋」、「真面目」、「素直で育成しやすい」、「現場適応能力が高く、作業に強い」等が 1 件ではあるが新たに挙げられている。一方、『専攻科修了生が劣っている点』としては、前回以前からある「対人的なコミュニケーション能力が低い」が複数回答あるのに対し、前年まで指摘されていた「語学力が低い」は 1 件にとどまっているほか、「心の成長の低さ」、「視野が狭い」、「自ら進んで行わない」等が 1 件ではあるが新たに挙げられている。

【学習・教育到達目標に関する設問】

回答数 126 社のうち、学習・教育到達目標における不要な項目は、『ない(チェックのなかった企業を含む)』が 90% (113 社) を占めており、前回 (H27 年度) の 91% (91 社)、前々回 (H25 年度) の 88% (106 社) と大きく変わっておらず、総じて、高いポイントを維持している。他方、『ある』が 10%となっており、前回 (H27 年度) の 9%、前々回 (H25 年度) の 12%と大きく変わっていない。

一方、本校の教育プログラムの目標において、企業の立場から取り入れることが望ましい事項がありますかの項目に対して、『ある』が 85% (H27 年度は 73%、H25 年度は 77 %)、『ない』が 15% (H27 年度は 27%、H25 年度は 23%) となっており、企業の立場から付加すべき項目が経常的にあることがうかがえる。特に、今年度、『高度なコミュニケーション力』は 32%に達している。本校の学習・教育到達目標に 90%の高い値で不要項目がないことから、社会に対して良い目標が設定されていると判断されるものの、企業の立場から不足するものがあることもわかり、今後の本校の学習・教育到達目標の改定(付加)を考える段階かもしれない。今後の動向を注視していく必要がある。

【自由意見】

今回は、21 件の意見が寄せられ、前回 (H27 年度) の 17 件、前々回 (H23 年度) の 22 件と同程度であった。内容は多岐にわたっているが、上記設問事項に関連した内容や高専卒業生・修了生が有する専門知識、技術力、統率力等における長短所の指摘、要望・意見(特に高専を取り巻く環境の変化に伴う全高専での変革に関する指摘(一学科制や 2・4 学期制)があり一読しておく必要があるように思われる)、期待感等、貴重な意見として真摯に受け止める必要があると思われる。

3. あとがき

本校の教育システムならびに教育プログラムを継続的に改善・向上するために、本委員会では H14 年度から毎年アンケートを実施し、集計、分析そして報告活動を展開しています。本調査報告書は 13 回目の発刊を迎えます。今回は H29 年 1 月から H29 年 11 月までのアンケート実施分を主として整理し、前回（第 12 回報告書）とそれ以前のものに記載された各項目と対比して分析したものです。

今回のアンケート集計・分析の結果、継続的改善・向上という観点から評価すると、本校の教育システムならびに教育プログラムは、全般的に良好な状態を維持していると言えます。ただし、依然として改善あるいは経過観察を要する事項も見受けられます。

卒業時アンケートでは、準学士課程の【教育全般の総括に関する設問】において、『一般教育』では、全学的には、前年に引き続き過去 4 年間で [満足度] は最高値を示し、良好な結果が得られました。ただし、学科毎では [満足度] は上昇下降を年度ごとに交互に繰り返している状況で、年度ごとの変動が大きい状況です。『専門教育』では、全学的には、『一般教育』と同様に過去 4 年間で今回 [満足度] は最高値を示し、高評価が得られました。ただ、学科毎に見ると、高ポイントを維持している学科が複数あるのに対し、年度による高低差が大きい学科やこの 5 年間で満足度が最も低かった学科もあります。また、『自分自身に実力がついたと思うか』の設問に対しても過去 5 年間で「身に付いたと思う」と回答した学生は最も低い 22% に留まっており、しかも 4 年間の間に年々低くなっているのも懸念されます。ただし、「身についたと思う」と「おおむね身についたと思う」までを含めると 84% の学生がそのように回答しており、過去 5 年間の値の中でも比較的良好的な数値を示しています。

専攻科修了時のアンケートでは、【教育全般の総括に関する設問】、【各教科の教育に関する設問】について、ここ数年、いずれの項目においても概ね 70% 以上の『満足度』が得られており、大きな問題はないと考えられます。しかし、「技術英語」については、必要性は高いと認識されていますが、到達度の認識は 70% に達していません。今後学生の達成度を上げるための工夫が望まれます。また、例年指摘されている地域協働関連科目に関する必要性の認識の低さについては、昨年度よりは数値の改善がみられるものの依然低い傾向にあるため、これらの科目に関して見直しが必要ではないかと思われまます。学会発表や特別研究発表会（ポスターセッション）に関しては、学生からの『満足度』もかなり高く、今後も活発な研究発表の場面拡大が期待されます。また、専攻科修了要件の一つであった「TOEIC400 点相当を達成すること」が H28 年度入学生から除外されましたが、今後より一層の英語力向上のための支援体制強化が求められます。

2 年ぶりに実施した OB・OG アンケートでは、本校の教育・研究環境についてほとんどの回答者から肯定的な回答を受けています。しかし、約 3 割の回答者から、本校の学習・教育到達目標の各項目に関して、「実践力」や「コミュニケーション能力」、さらに「課題探求力」や「課題解決力」に関しての、今後取り入れることが望ましい項目の指摘がなされています。これらの貴重な意見を参考にして、学校としての可能な対応を今後実践していく必要があると思われまます。

本調査報告書が、関係組織・部署、各教職員の学校の教育システム・プログラムの継続的改善・向上に資することを切に願っております。そのためには、本調査報告書を用いて本校の教育システム・教育プログラムに対する学内外からの評価を適確に掌握して頂き、そして、各関係組織・部署等で共通認識に基づいた改善・向上が実現できますことを期待致します。

最後に、各種アンケート調査にご協力・ご尽力ならびにご支援頂きました関係各位・各組織に深く感謝の意を表します。

学校運営検討委員会

委員長 中島 洋典（一般教育科）

石丸 智士（創造工学科）

小林 正幸（創造工学科）

篠崎 烈（創造工学科）

森山 英明（創造工学科）

竹内 伯夫（一般教育科）

事務担当 松永 佳織（総務企画係）